
赤と青の神話 三章

深江 碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤と青の神話 三章

【Nコード】

N2311Z

【作者名】

深江 碧

【あらすじ】

意識を取り戻したクロフは、間もなくディリアが処刑されることを知る。何とか処刑を止めさせようとクロフは躍起になるが、それもかなわない。そこでクロフはディリアの手をとって、牢屋から抜け出そうとする。

やっと三章です。ようやく半分くらいでしょうか。稚拙なところは多々ありますが、少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

救いの手 1

三章 救いの手

クロフが床から起きられるようになったのは、それから三日後のことだった。

女神官とフィエルナ姫に交代で看病され、クロフはみるみる気力を取り戻していった。

老薬師の目を盗み部屋から抜け出し、クロフが真っ先に向かったのはディリーアのいる地下牢だった。

牢に来たクロフを見て、ディリーアは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「何の用だ」

ディリーアはクロフが以前牢を訪れたときと同じように、冷たくあしらう。

「お礼を言っておきたくて」

クロフは苦笑いを浮かべ、ディリーアの鋭い瞳を受け流す。

「あなたが月の神の使者を追い払い、ぼくを助けてくれたのでしょう？　ありがとうございます」

「別に」

ディリーアはつまらなさそうに吐き捨てる。

「ありがとうございます」

クロフはもう一度繰り返す。

クロフはかつて湖でしていたように、取り留めのない話をし、ディリーアがそれに相槌を打つ。

牢を去る間際、ディリーアの青い瞳に悲しみが宿っていたのを、その時のクロフは気付かなかった。

「正直、あの女の牢を見回るときは、いつも肝が冷やされます。自分もいつ呪いをかけられるかって」

地下牢の階段へ向かう途中、牢番は大きく息を吐き出した。

遠くで水の流れる音と、囚人の叫びが辺りに木霊する。

「大変ですね」

クロフは何気なく答える。

「そうなんですよ。でも、これも明日までの辛抱です。明日の昼になれば、あの女は広場で処刑されるのですから」

クロフは足を止める。

「いま、何と？」

松明に照らされ、牢番の影がちらちらと揺れる。

牢番はクロフが後ろに付いてこないことに気が付くと、ゆっくりと振り返った。

救いの手2

「へ？ 何がです？」

「彼女が、明日には処刑されると」

牢番は何度も瞬きし、クロフの顔をまじまじと見つめる。

「もしかして、知らなかったんですか？ いま城中、その話題で持ちきりですよ」

「詳しい話を聞かせてくれ」

牢番は腰に下げた牢の鍵束を揺らし、ためらいがちに話し出した。

部屋に戻って来たクロフは、寝台のそばの椅子に座っている人影に気が付いた。

鮮やかな赤い服をまとい、フィエルナ姫はクロフに笑いかけた。

「お加減は、もうよろしいのですか、クロフ様」

フィエルナ姫は柔らかな笑みを浮かべ、クロフを出迎えた。

「ええ、もう大丈夫です。ご心配お掛けしました。いつまでも寝台で横になっていては、体がなまってしまいます。たった今、外の風に当たってきたところです」

「そうですか。それは良かったです」

フィエルナ姫は胸元に手を当てる。

クロフはしばしためらった後、真剣な顔つきになる。

「あの、姫。少々お聞きしてもよろしいでしょうか？」

クロフはフィエルナ姫をじっと見つめる。

あまりに真剣な目差しで見つめられたため、フィエルナ姫は恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「わたしでお答えできることでしたら」

蚊の鳴くほどの小さな声で、フィエルナ姫は恥ずかしそうに答える。

「単刀直入に聞きます。彼女が、牢にいる魔女が、明日に処刑されるということを、姫はご存じですか？」

クロフは静かだが、怒りさえ感じられる声音で尋ねる。

「え、ええ」

フィエルナ姫は両手を胸の前で固く握りしめ、小さくうなずく。

「では、ぼくが太陽の女神の神託を受け、彼女を探していたということも、姫はご存じなのですね？」

フィエルナ姫はわずかに身じろぎする。

「はい、神官様達に聞いて、存じております」

両手を胸の前で組み替え、フィエルナ姫は小さくうつむいた。

「知っていたのなら、どうしてぼくに彼女の処刑について教えてくださらなかったのですか？ あなたが太陽の女神の神託のことを知っていたのなら、尚更です」

救いの手3

クロフは赤金色の瞳には、荒野を焼き尽くすほどの激しい炎が渦巻いている。

「それは」

フィエルナ姫はうつむいたまま、クロフの目から視線をそらす。

「何をしている」

鋭い一言が部屋に響き、辺りは再び静まり返る。

クロフがそちらに視線を向けると、部屋の扉の前にロキウスが杖を手に立っている。

戸口に立つロキウスは、クロフとフィエルナ姫を順に見比べる。

二人のいる方に早足で駆け寄り、ひたすら縮こまっているフィエルナ姫を見て取ると、射るような目付きでクロフをにらみつける。

「文句なら、俺が聞こう。姫に八つ当たりするな」

フィエルナ姫は軽く会釈すると、戸口の方に小走りに駆けていった。

フィエルナ姫が扉の向こうに消えたのを確認して、ロキウスは切り出した。

「お前が魔女のことで言い分があるのはわかる。だからあらかじめ、姫に話さないよう頼んでおいたのだ。本当ならば魔女の処刑が済むまで、お前をこの部屋から出さない約束だったのだが」

ロキウスは冷やかな目差いでクロフを見つめる。

「わかつているのか？ 彼女は太陽の女神の神託にある人だぞ。彼女を処刑したら、どんな神罰が下るか」

ロキウスはクロフの怒りをものともせず、氷のように冷たく言い放つ。

「だが、あの女は多くの人々を殺し、苦しめ、広大な土地を腐らせた魔女ではないか。そんな女に、太陽の女神の恩寵があるものか。それに処刑しろと命令したのは、おれ達神殿側の人間ではない。そ

れを決めたのは、ここに暮らす国民達だ」

クロフは愕然とした。

頭の片隅ではわかつていたことだったが、いざ実際に目の前で言われると、強い気持ち揺らいだ。

クロフは唇をかみしめ、何も言わず部屋を走り出た。

クロフは廊下を走り、国王の部屋へと向かう。

デイリーアの処刑をやめさせたい一心で、兵士が止めるのも聞かず、部屋へ飛び込んだ。

部屋には南の王と数名の家臣、周りを固める兵士達、そしてクロフの世話をしてくれた女神官がいた。

彼らは話を中断し、息を切らせ部屋に飛び込んできたクロフを一齐に見つめた。

「騒々しい。部屋で静養していたはずのお前が、どうしてこんなところにいる？」

一番奥の椅子に座っていた南の王があごに手を当てる。

クロフは慌てて礼の姿勢を取る。

救いの手 4

「突然の訪問、失礼いたします。しかし王様に急ぎお願いしたいことがありまして、こうして参った次第でございます」

周りにいた家臣達が口々に叫ぶ。

「何と無礼な」

「こんな者の言うことなど、聞く必要はございません」

「さつさと部屋へ戻れ。我々は忙しいのだ」

家臣達を片手で制し、南の王は大きくうなずく。

「いいだろう。お前の言い分を聞こう。その願いとやらを申し立てみよう」

「ありがとうございます」

クロフは頭を低く垂れた。

「実は、明日の魔女の処刑の件でお願いがあつて参ったのです。明日の魔女の処刑は、取りやめていただけないでしょうか？」

周囲にいた家臣や兵士達がざわめいた。

女神官は冷淡な瞳でことの成り行きを見守っている。

「なぜだ？ お前も知つての通り、あの魔女が処刑されるのは当然の処罰だと思うが」

クロフは顔を上げ、赤金色の瞳で王をひたと見据える。

「はい、わたしもそれに異論はございません。しかしあの魔女は太陽の女神の神託に示された方。人の手で処刑をすれば、この地にどんな災いを招くかも知れません。そこであの魔女の処罰は、わたし達神殿に任せてもらえないでしょうか？」

南の王は傍らにいた女神官に目配せをする。

女神官はクロフの前に進み出た。

「今回の件は、神殿の大導師様にもご相談したのですが、大導師様はこちらで処罰するのが妥当であると判断されました。たった今、早馬で報告が来たところです」

女神官は静かに言い放つ。

「しかし」

クロフはなおも食い下がる。

「しかし、それにしても処刑が早急すぎるのではないですか？ も
っと詳しく罪状を調べる必要が」

「その必要はない」

家臣の一人が口を挟む。

「死んでいった者のためにも、農地を追われた農民のためにも、ま
た国民すべてのためにも。魔女の処刑は早急に執り行うべきだ」
別の家臣が後を続ける。

「民達の悲しみ、苦しみ、苦しみを取り除くためにも、魔女の処刑
は必要なのだ」

救いの手5

「処刑が執り行われて、初めて彼らの心は癒される」

年老いた家臣が白いひげをしごきながらつぶやく。

「他に言い分はあるか？」

南の王の重苦しい声が響く。

クロフは片膝を付いたまま、うつむき拳を握りしめた。

「ありません」

クロフはかろうじて声を絞り出し、爪が手のひらに食い込むほど強く握りしめた。

「失礼しました」

吐き捨てるようにつぶやき、王に十分な礼も取らないまま、クロフはその部屋を後にした。

クロフは暗い気持ちのまま、廊下を歩いていた。

うつむき今にも倒れそうな青白い顔で歩いていたので、すれ違った人々は目を見張り、進んで声をかけようとする者はいなかった。

「おい！」

行く手を阻むように腕が差し出され、クロフはぼんやりと顔を上げる。

目の前にはロキウスが不機嫌な顔で立ちはだかっている。

「突然部屋を飛び出したから、心配してきてみれば、案の定だな。

あの魔女のことなら、もう諦める。王に異議を申し立てても、今更判断は覆らない」

クロフは黙ってロキウスの脇をすり抜けた。

「あの女のことはもう忘れる。お前は神託の通りに行動した。今更お前を責める者などいない。太陽の女神様も、神託の通りに行動したお前をお許しになるはずだ」

「うるさい」

クロフは吐き捨てるようにつぶやく。

「神託、神託って、ぼくがそのただけにここまで来たと思っているのか？ 神殿でずっと一緒に育ってきたお前まで、ぼくがそれだけの理由でここまで来たと、本当に思っているのか？」

クロフはロキウスをにらみつける。

その赤金色の瞳には、怒りとも諦めとも付かない感情が浮かんでいる。

「神殿にいた頃、ぼくがどんな気持ちでいたか、太陽の女神様の神託を受け、火の神の生まれ変わりとしての宿命を背負われた子供がどんな気持ちでいたか、一緒にいたお前でさえ本当のところはわからなかったというわけか」

ロキウスはクロフの静かな怒りに気圧され、わずかにたじろいだ。「神殿の中でも神々の声を聞き、人には見えないはずの使者の姿が見えることが出来る人間は数少ない。それに加え、他の生き物と話が出来、詩も唱えず神々の奇跡を自在に操ることが出来る者など、今では万に一人いるかどうかだ。それをどうだ、生まれながらに太陽の女神様の寵愛を受け、軽々と神々の奇跡が行える子供が平民にいる。果たして周りの人々はその子供をどう思うか。平民風情がと、気に入らない人間もいるだろう」

クロフは深いため息を吐き出した。

「ぼくが子供だったからと言って、神殿内の出来事を何も知らないと思っているのは間違いだ。ぼくは知っている。それを巡り神殿内でどんな争いが起こり、どれほどの心ある無実の人間が罰されたかを」

クロフは悲しげに微笑み、ロキウスに背を向け歩き出した。

「動物や木々の言葉がわかると言うことは、人々の感情にことさら敏感ということなんだ」

それだけ言うと、クロフはロキウスを振り返らず、逃げるように早足で歩き去った。

救いの手 6

部屋に戻ってきたクロフは、寝台の上に座り炉ばたの炎を見つめてぼんやりとしていた。

頭に浮かぶのは今牢にいるディリアのことばかりだった。

気が付けばふらふらと部屋を出て、地下牢の方へ歩いていった。

クロフが地下牢にたどり着くと、牢番は牢の前にはいなかった。階段から下りた突き当たり、牢番の詰め所で蜜酒を酌み交わしていた。

口々に明日の魔女の処刑を喜び、その声がクロフのいる階段のところまで聞こえてくる。

クロフは牢番の詰め所に顔を出さず、さっさと奥の牢屋へと歩いていった。

ディリアのいる牢の前にたどり着いたクロフは、背を向けて石の床の上に横たわっている人影を見つけた。

クロフが声をかけようとしたら、人影がもそもそと動き起きあがった。

「またお前か。まだわたしに何か用があるのか？」

ディリアは眠りを邪魔されたためか、大きなあくびをかみ殺す。

「ごめん」

クロフは素直に謝った。

「でも、今夜中に聞いておきたいことがあったんだ」「何だ？」

ディリアは気だるそうに石の上にあぐらをかく。

クロフは長い間ためらってから、やっと口を開いた。

「あなたは、この牢から出たいと思わないのですか？」

クロフの問いに、ディリアは首を傾げる。

「つまりその、あなたなら、水を自在に操るあんなすごい力を持っているのなら、逃げられるはずです。そうしないのはどうしてですか？」

ディリーアの虚ろだった青い目に生氣が戻ってきた。

「確かにお前の言うとおり、牢を出ようと思えば出られないこともない」

「では、どうして」

クロフの言葉は最後まで続かなかった。

ディリーアの射るような鋭い瞳に、途中で遮られた。

「牢を出て、ここから逃げて、それでどうする？」

ディリーアの泉の底のような青い瞳には、有無を言わさぬ強い輝きが宿っている。

「わたしが牢を逃げ出すには、恐らく牢番を殺さなくてはならないだろう。手向かう兵士達も殺さなければならない。国民をすべて敵に回さなければならない。それでどうする？ この先どこへ逃げるのだ？」

「それは」

クロフには答えられなかった。

何よりもディリーアの冷たく悲しげな瞳に射すくめられた。

「国民と神殿の人間を敵に回して、わたしにどうしろと言うのだ？ わたしが城に連れてこられてから、あの森も焼き払われたと聞く。一体わたしにどこへ行けと言うのだ？ わたしには帰る場所も、迎えてくれる家族も友人も、もう何も無いというのに」

ディリーアはうなだれ、腕に顔を埋める。

クロフも沈痛な表情でうつむいた。

「でも」

絞り出すようにクロフは声を張り上げた。

「でも、逃げないと、あなたは明日の正午、広場で処刑されてしまう。それでもいいのですか？」

ディリーアは伏せていた顔を上げ、クロフを見上げる。

「知っていたさ。そんなこと」

吐き捨てるようにつぶやく。

「森にいたときから、お前に初めて会ったときから、いやその前からずっと、覚悟していたさ。何者かがわたしの命を奪うことを。いつかわたしがお前に殺されることを」

「そんなことは！」

クロフは口ごもった。

ディリーアの言葉を否定するはずが、続く言葉が出てこない。

「そんなことは無い、か？ そうだな、お前が直接手を下したわけではないからな。だが結果的には変わらない。お前が、神殿の人間が来たせいで、わたしは森から追い出され、森を焼かれ、今ここにこうしている」

クロフはうなだれたまま、黙ってディリーアの言葉を聞いていた。どういふ言葉を並べても、ディリーアに詫びることは出来ないと考えたからだ。

「まあ、仕方がない。これがわたしの招いた結果ならば、責め苦を負うのはわたし一人でいい。気楽なものさ」

「ごめん」

クロフは鉄格子を両手でつかむ。

「本当に、ごめん」

クロフは石の床にひざまずき、深く頭を垂れる。

「気にするな。お前が気にしてどうにかなることでは無いのだ。これがわたしの運命だったのだ。お前が気に病む必要はない」

ディリーアはクロフの鉄格子をつかむ手に傷だらけの細い手でそっと触れる。

「わたしのことは忘れ、お前は神殿に戻れ。そしてお前の力を万民のために役立てる。なあと、お前ならば良い神官になれるさ。わたしが保証する」

ディリーアの青い瞳が優しく細められる。

クロフはその微笑みに目を奪われた。

それはクロフの中で強い意志の炎を新たに灯らせ、燃え上がらせた。

救いの手 7

牢屋から戻ったクロフは、真つ先に女神官のいる部屋へと向かった。

南の王との一件は、やはりクロフの中では納得できない点が多かった。

ディリーアの処刑の話も含め、今一度理由を尋ねたいと思ったのだ。

「失礼します」

部屋に入ると、女神官が炉ばたの側の椅子に腰を下ろしていた。炉の中の炎は赤々と燃え、火の粉を巻き上げている。

女神官はクロフの姿に気が付くと、ゆっくりと顔を上げた。

「やはり、来ましたね」

白い裾を揺らし、女神官は椅子から立ち上がった。

「明日の処刑の件で、考え直していただけないかと思ひまして」

クロフは離れた場所から、小柄な女神官を見下ろした。

白い衣をまとった肩は細く、裾から垂れた手はしわが刻まれている。

何年も会わないうちに、この親代わりの女神官はずいぶんと年老いたように見える。

「どうしてです？ 彼女は罪人です。多くの人々を殺してきたのですよ。処刑されて当然だと思いますが」

「それはわかっています」

クロフはためらいがちに答える。

女神官は少し疲れたように、長い息を吐き出した。

「どうしてあなたはそこまで彼女にこだわるのですか？ 太陽の女神様の神託のためですか？ それとも他に理由があるのですか？」

「それは」

クロフは口ごもりながら、言葉を探すように何度も繰り返した。

「それは、ぼくが彼女に助けられたからでは無いでしょうか？ 彼女は確かに、大勢の人を殺しましたし、妖しげな術を使う魔女とも言われています。農地を沼地に変え、多くの民を苦しめました。だから処刑される理由はぼくにも十分理解できます。でも、それではいけないんです。このままでは、何も解決しない。それは家に閉じこもり、じつと身を潜め、耳や目をふさいで、嵐が通り過ぎるのを待っているだけのような気がするんです。それでは駄目なんです。もしかしたら、この先同じことが起こるかも知れない。上手く言えないけれど、何か、きつと何か、もっと別の方法があるはずなんです！」

女神官は疲れたように息を吐きだし、ふつくと微笑んだ。

「あなたは変わりましたね。そろそろそういう時期なのかも知れませんが」

女神官はクロフにゆっくりと背を向けて、部屋の片隅にある木の箱に向かう。

箱の中に置いてあった布包みを手に、クロフのいる炉ばたに戻ってきた。

「これを、持って行きなさい」

クロフが手渡され布包みを紐解くと、中から一振りの剣と盾が現れた。

「これは」

クロフは件を手に取り、輝く刀身を鞘からわずかに引き抜く。

それはかつて南の王から与えられ、森の湖でヒーネとケーディンが失ったものだった。

「彼が、ロキウスが森の討伐に行ったとき、持ち帰ったものです。王はほうびとして彼に与えたのだけれど、彼はそんなものはいらないと言って、わたしに押しつけたのです。これはあなたが持つて行きなさい」

クロフはロキウスの仏頂面を思い出して、苦笑いを浮かべる。

「どうして、これをぼくに？」

クロフは女神官の深いしわの刻まれた目元を見つめる。

「あら、だってこの先、女の子を守って旅を続けるのに、必要なものでしょう？」

女神官は笑みを浮かべ、こともなげに言い放つ。

顔からは冷たい雰囲気が消え、少女のような朗らかさが宿っている。

「今回の一件で、あなたが神殿に戻るべきではないとわかりました。あなたは今まで神々によく仕え、後輩の神官達に気を配り、神殿の雑事を一挙に引き受け、人々のためによく尽くしてきてくれました。太陽の女神様の神託だってそう。あなたは誰もがそうそう出来ることではないことをやり遂げたのですよ」

クロフは首をゆっくりと横に振る。

「でも、ぼくは彼女を救うことは出来なかった。それに、森へ行く人々を思い止まらせることが出来なかった。神託だって、太陽の女神様のご期待には添えられなかった」

女神官は節くれの手でそれを制す。

「まだ、諦めてしまうには早いですよ。あなたは若いのですから、まだまだ様々なことが出来るはずです。諦めてしまえば、そこで終わりです。大切なのは自分で考えること。自分で考えて、あなたが少しでも後悔しないと思える方へ進みなさい。わたしが助けてあげられるのもここまでです。さあ、行きなさい」

白いものが混じった長い髪を揺らし、女神官は優しげに微笑む。

クロフは剣と盾の包まれた布包みをしっかりと胸に抱き、女神官に一礼して小走りに部屋を出て行く。

部屋を出る間際、クロフは女神官をわずかにかえりみた。

「ありがとう、義母さん」

幼い頃何度となくそう言ってきたように、クロフは屈託のない笑顔で礼を述べた。

女神官が手を伸ばす前に、クロフの姿は足音を残して廊下の向こうに消えていった。

「太陽の女神ラナンよ。これで良かったのですよね？」

女神官は両手で顔を覆い、涙を流し石の床の上にしゃがみこんだ。

救いの手 8

ディリーアはまどろみの中にいた。

横になり目を閉じると、地主の奴隷として働いていた頃の、貧しくても幸せな日々が思い出された。

父がいて、母がいて、兄や同じ奴隷の仲間がいる。

それだけで彼女はなにもいらなかった。

それが彼女の世界のすべてだった。

そして目を覚ますと、決まって虚しい気持ちに胸を苛まれた。

その日も同じだった。

直前まで幸せな夢の中にいた彼女は、松明のはぜる音で目を覚ました。

夢はあぶくのようににはじけて消え、後にはどうしようもない空虚な気持ちだけが取り残される。

ディリーアは起きあがり、何度か頭を振って壁にもたれかかった。光の差し込まない地下牢では、はっきりした時刻はわからない。

しかし牢番の兵士の巡回や交代を見れば、おおよその時刻はディリーアにも見当が付いた。

その日に限って、牢番が昼過ぎから酒盛りを始め、ずっと今まで牢番が巡回や交代をしたことはなかった。

そのためいまが夜のどれほどの時刻なのか、ディリーアには知ることが出来なかった。

時間がわからなくても、ディリーアは一刻一刻と自分の処刑の時間が近づいているのを感じていた。

次に牢番が牢屋の前に立つときは、きっと自分が処刑される時だろう。

ディリーアは石壁に背中を預けたまま、両膝を抱える。

悲しいような、苦しいような、胸の奥が鈍く痛む。

死ぬのが怖いと言ったら嘘になるが、クロフにあんなことを言った手前、ディリーアは自分の死を前にして取り乱すようなことはしなかった。

森にいるときから、クロフと出会う以前から、奴隷として逃げ、追っ手を手にかけた時から、こうなることは予想が付いていた。

自分の姿が大蛇に変わり、水の女神としての記憶が戻ったときから、ずっと人を殺す罪の意識に苛まれてきた。

——もう人は殺したくない。生き物を傷つけない。

彼女の切実な思いとは裏腹に、森へ来る人間は後を絶たなかった。大蛇になったディリーアは、何とか人間達を森へ来ないよう説得しようとした。

だが、彼女の声は彼らに届かない。

言葉は通じて、彼らは大蛇が威嚇する鋭いうなり声にしか受け取らなかったのだ。

彼女はいつしか絶望し、生き物すべてを憎むようになっていった。あるいは天上での月の神との一件が、彼女の心に影響を与えていたのかも知れない。

どちらにしても、彼女の水の女神としての力が災いし、森の木々は暗い木陰を作り、他の生き物を拒絶するかのように枝を生い茂らせ、周りの農地を沼地へと変えていった。

近くに住んでいた村の人々は土地を捨て、住み慣れた土地を後にした。

昔のような緑溢れ、羊や牛がのんびりと草をはむ光景は失われた。彼女はそれでもかまわないと思っていた。

それも仕方がないと思っていた。

そう、クロフと出会うまでは。

クロフは今までに森を訪れた人間達とは違っていた。

火の神の生まれ変わりであるからかも知れないが、ディリーアの命を奪うことなく、沼地を元のような豊かな土地に戻そうとしたの

だ。

ディリーアは鏡のようになめらかな湖面に空を映し、岸边を見ながらクロフのことを考えるようになった。

空行く渡り鳥を呼び止めては、クロフのことをつぶさに尋ねるようになった。

数日おきに森を訪ねてくるクロフと話し、美しい豎琴の調べを聞いているうちに、ディリーアの中にあつた凍てついた氷がゆっくりと溶けていった。

何かクロフの手助けをしてやりたい。

いつしかディリーアは自然とそう思うようになっていた。

ディリーアは自分の死を恐ろしく感じたが、それ以上に自分が生き長らえることによって、クロフに迷惑がかかることが心苦しかった。

自分が処刑されることによって、クロフの立場が少しでも良くなるのなら、この命も無駄ではないと思うことが出来た。

今のディリーアにはそれで十分だった。

ディリーアは膝を抱えたまま、その中に顔を埋めた。

——これでいい。これ以上のことは望んではいけない。

ディリーアは胸の奥からわき上がる感情を必死に押し戻した。

堪えきれず、目頭に熱いものがこみ上げてくる。

——逃げてはいけない。逃げれば、彼に咎が及ぶ。

ディリーアは地主の元から逃げ出すとき、兄の言葉を思い出した。奴隷達の中には、このまま地主のところに残まるうとする者達もいた。

その者達のはじめから諦めていた。

どうせ逃げ出せない。

捕まれば殺されるだけだと諦めていた。

兄はそんな者達を奮い立たせ、説得したのだ。

「このままここに残って死を選ぶか、新しい奴隷が入るのを待つか、おれならどちらの選択も選ばない。ほんのわずかな誇りを賭けて、

逃げ出すことを選ぶ。おれ達全員が生き残れなくても、一人でも逃げのびる者がいて、無事に北の故郷にたどり着くことが出来たなら、仲間と共におれ達の亡骸を葬ってくれるのなら、おれはここで死んでも悔いは無い」

両親が死んでから、奴隷達をまとめていた兄は、その話を終えた後、悲しそうな目をして彼女の頭を優しく撫でてくれたのを覚えている。

ディリーアがもっと早く水の女神の記憶が残っていれば、もっと早くその力に気付いていれば、このような最悪な事態は起こらなかったかも知れない。

しかしすべては遅すぎたのだ。

ディリーアは声を殺して泣いた。

昔の感傷に浸って泣くなど見苦しいとは思ったが、きっと処刑の日国民の衆目にさらされれば、涙の一滴も出てはこないだろう。

そのためだろうか。

ディリーアは牢屋の前に立った人影にすぐには気付かなかった。

「泣いているのですか？」

突然上から投げかけられた声に、ディリーアは驚いて顔を上げた。

救いの手9

牢屋の鉄格子を挟んで、布包みを抱えたクロフが松明の明かりに照らされ立っていた。

デイリーアは慌てて涙をぬぐい、顔を背けた。

「な、何でもない」

デイリーアは精一杯強がって見せる。

しかしそれも今となつては無意味なことのように思えた。

クロフは少しだけ微笑んで、真剣な顔つきに戻る。

「少し鉄格子から離れていて下さい」

クロフは布包みの紐を解き、中から一振りの剣と盾とを取り出した。

「何をする気だ？」

デイリーアは眉をひそめる。

「今からこの鉄格子を斬ります。大丈夫、この剣があればそんなことは造作もないはずです」

「だから、何をする気だ！」

デイリーアは鉄格子にしがみつく。

クロフは少し困ったように、デイリーアから目を背ける。

「今からあなたを助けます」

デイリーアは自分の耳を疑った。

気が動転していたせいで、自分が聞き間違えたと思つたほどだ。

「助ける？ お前は何を言っているんだ？」

デイリーアは何度もまばたきを繰り返し、クロフを仰ぎ見る。

「今はゆっくり説明している暇はないんです。どうか鉄格子から離れていてください」

クロフは鞘から剣を抜き放ち、刀身を横に構える。

肩でゆっくりと呼吸し、それに応じるように剣の刀身から炎に似

た赤い光が漏れ出す。

クロフの赤金色の瞳も、髪も、炭火が燃えるように徐々に赤みを増していく。

鋭いかけ声と共に、クロフは剣を横になぎ払った。

返す力でもう一度斬りつける。

すると剣で触れた鉄格子が、焼けた石のような赤い塊になって床に飛び散った。

赤い鉄片は石の床に落ちる前に、黒い塊になって辺りに散らばった。

クロフは剣を鞘に収め、鉄格子の切れた隙間から体を曲げて牢の中に入る。

牢の奥で座り込んでいるディリアと目線を同じくする。

「よかった。どこにも怪我はないですね。正直、上手くできるかどうか心配だったんです」

ようやく正気に戻ったディリアは、クロフに近くから顔をのぞき込まれているのに気が付いて慌てて顔を背ける。

「さあ、早く逃げましょう。今の物音でいつ牢番が駆けつけてくるとも限りません」

クロフはディリアの手をつかみ、引っ張った。

「何だと？」

ディリアはクロフの手を振り払う。

「逃げる？ お前はわたしを逃がすために、わざわざ牢までやってきたというのか？」

クロフはディリアの冷たく青い瞳にもひるまず、大きくうなずいた。

「ええ、そうです」

クロフはしゃがみ込み、ディリアをのぞき込む。

「以前に言いましたよね？ ぼくはあなたを救いたいと。あなたが生き残るためには、今夜しか逃げ出す機会はないんです」

クロフはディリアに手を差し出した。

ディリーアはじつとその手を見つめている。

「何故、お前はわたしを助けようとする？　わたしを助けて、お前にどんな利益があるというんだ？」

クロフは差し出した手を引っ込めて、自分の手の平を見つめる。

「それは、ぼくがそうしたいと思うから。そうしなくては、いずれ後悔すると思うから。本当はあなたを守りきれぬ自信は無いんです。もしかしたらここで逃げることによって、あなたをもっと苦しい目に合わせてしまうかも知れない。辛い目に合わせてしまうかも知れない。でも、どうせ生きるなら自分の望むように生きたいし、あなたにも自由に生きて欲しいと思う。後悔は少しでも少ない方がいい。少なくともぼくはそう思うんです」

照れくさそうにクロフは頭をかいた。

「答えになっていないかも知れませんが」

クロフはもう一度ディリーアに手を差し出した。

「わたしは」

ディリーアはクロフの手を見つめ、自分の傷だらけの手を見つめた。

「わたしは、お前の足手まといにだけはなりたくないと思った。ここで命尽き果てるというのなら、それでもかまわないと思った。だが、こうして手を差し出されたら、やはり命が惜しくなるものらしい。不思議なものだな」

幼い頃、兄に差し出された手を取ったときのように、ディリーアはクロフの手に自分の手を重ねた。

その先にどんな苦しみや悲しみが待ち受けていようと、ディリーアは今度こそ心がくじけ、巨大な白蛇になることは無いと感じていた。

救いの手 10

城壁に白い月がかかり、館を見下ろすように闇夜を照らし出している。

月には霞がかかり、月は虹色の燐光をまとい光り輝いている。

月明かりの照らし出す中庭に出たクロフは、木陰に立つ幾人かの人影に立ち止まった。

人影は青白い光に照らされた草地を、こちらへとゆっくりと近づいてくる。

クロフはデイリーアを背中にかばい、持っていた盾を体の前に構える。

クロフは剣の柄を握りしめ、いつでも剣を引き抜けるように身構えた。

人影との距離があと数十歩というところで、突然彼らが声を上げて走り寄ってきた。

「ああ、やっぱりそうでしたか」

クロフは聞いたことのある声に警戒を解き、構えていた盾を下ろす。

白く輝く草地の上に立ち並んでいたのは、見知った男達の顔だった。

「お兄ちゃん！」

小さな人影が彼らを追い越し、クロフの前に走り出た。

人影はクロフと共にこの一年の間土地を耕した五人の奴隷達だった。

少年はクロフの足にしがみつき、顔を上げる。

「よかった。お兄ちゃんが助かって。ぼく、太陽の女神様に一生懸命お祈りしたんだよ。お兄ちゃんが、助かりますようにって」

顔を上げた少年は、クロフの後ろにいるディリーアに気づき、目を丸くした。

「あれ、お姉ちゃんも一緒なの？」

少年は不思議そうに首を傾げる。

「こちら、お二人をあまり困らせるんじゃない」

追いついてきた体格のいい男が少年の肩をつかみ、クロフの足から引き離す。

男の後ろから、奴隷達が次々と歩いてくる。

「皆さん、どうしてここへ？」

クロフは奴隷達を見回し、驚きの声を上げる。

体格のいい男はくすぐったそうに頭の後ろをかいた。

「族長が、あなた方に一言別れの挨拶がしたいと言うもので」

体格のいい男は後ろから歩いてくる老人を振り返った。

腰の曲がった老人は白いひげを撫でながら、二人を仰ぎ見た。

「この夜が、あんた達と会うことが出来る最後の夜だと思ってな。」

もしわしが同じような境遇なら、逃げ出す時は大きな祝祭のある前日の、こんな月夜だと思ってな。あんた達を待っておったんじゃない」

老人は昔を懐かしむように目を細めた。

「またまた、族長つたら、そんなこと言って。現役を引退するのは、北の国に戻り、引き継ぎの儀式をしてからにしてください」

若い男が軽口を叩く。

「こら、よけいなこと話すんじゃないの」

中年の女が肘でつつく。

体格のいい男はばつが悪そうに頭をかいた。

「まあ、気にしないでください」

老人は快活に歯を見せて笑う。

「ははは、かまわんじやろう。いやいや、あんた達二人を見ていると、わしらも他人事のように思えなくっての。わしも若い頃は戦場を駆け巡り、南の国の奴らをあつと言わせたもんじゃ」

老人は白くなった眉の下から、鋭い目でディリーアの顔を伺う。

「お嬢さん、あんたは北の国の出だろう？ 恐らくあんたの父親はわしらと同じ、戦場で捕虜となった兵士じゃろう。可哀想にな。あんたが南の国の奴らに復讐しておったのは、大方仲間達の弔いのためじゃろうに」

老人は白いひげを節くれの指でしごく。

ディリーアは青い瞳でじっと老人を見つめている。

「族長」

辺りを油断なく見回していた体格のいい男が、小声で老人に耳打ちした。

「そうだな、あまり二人をお引き留めしても悪い。それにそろそろ辺りが騒がしくなってきたしこのう。全く、ゆっくり別れの挨拶もできんとは」

老人は名残惜しそうに二人を見上げる。

「わしらはあんたの残した土地を耕す仕事があるしのう。その仕事はフィエルナ姫が引き継いで、やってくれるそうじゃ。そのためまだしばらく北へは戻れそうもない。もし北へ行く機会があったら、子供達にそう伝えておいてくれんかの？ わしらは南で元気にやっている」と

老人はクロフを見て、歯を見せてにつこりと笑う。

深いしわに刻まれた顔に、少年のような朗らかさが宿る。

「わかりました。伝えておきます」

クロフが赤金色の瞳で見返す。

老人は満足したように何度もうなずいた。

「さあ、早く行ってください」

体格のいい男が二人の背中を押す。

「じゃあね。元気でね、お兄ちゃん」

「お気をつけて」

奴隷達に見送られ、クロフとディリーアは中庭の草地を走り去った。

奴隷達はいつまでも二人を見送り、手を振っていた。

救いの手 11

月明かりに照らされた屋根付きの回廊を走り抜けている間、クロフはどうしようも無い不安が胸の奥にわだかまっていた。

クロフはしきりに回廊の暗闇、茂みや下草の暗がりに目を落とす。
「おかしい」

クロフは走りながらぼつりとつぶやく。

春の祝祭を目前に控えているとはいえ、今までに警備の兵士誰一人ともすれ違わない。

それをクロフは不審に思ったのだ。

背後を走るディリーアも、先ほど奴隷達とのやり取り以来、ずっと黙り込んだままだ。

建物の影を曲がり、庭を通り抜ければ裏門にたどり着くと言うところで、クロフはその答えを知った。

裏門につながる小道のあちこちには、かがり火を焚いた警備の兵士達が大勢集まっている。

ゆづに百人はいる兵士を前に、クロフは苦笑いを浮かべ、背後に立つディリーアを振り返った。

ディリーアは暗い面持ちで両手を胸の前で固く握りしめている。

おもむろに顔を上げ、青く悲しげな瞳でクロフを見つめた。

「昔な、小さな奴隷の女の子がいたんだ。その女の子は、優しい両親や兄や仲間達に囲まれて、貧しくても幸せだった」

「何を」

クロフは言いかけたが、ディリーアの暗い表情に遮られた。

「ある時、女の子は仲間達と一緒に森へ逃げることにした。しかし多くの奴隷は殺され、兄も女の子の目の前で殺されてしまった。女の子は心を壊し、以来醜い化け物となって、人を襲うようになった」
ディリーアは目を伏せ、寂しげに笑う。

「と、途中まではどこの昔話にもありそうな話だな。この後王子様

が現れて、その化け物を倒し、見事王女様と結ばれれば完璧だな」
おもむろにクロフの肩に手を置いて、ディリーアは顔を伏せた。
「あの老人との約束、忘れるなよ」

クロフはディリーアの言葉の意味を瞬時に判断した。
「何を考えている？ まさか自分の首を彼らに差し出しに行くわけ
じゃないだろうな？」

ディリーアはうつむいたまま、つぶやく。

「さあな。だが、わたしの死によって彼らの心が癒えるのなら、何
かが変わるのなら、それはそれで意味のあることかも知れない」
「違う！」

クロフは大声で言い放つ。

「それは違う。彼らは何も変わらない。それではただの無駄死にだ
！」

クロフはディリーアの両肩をつかみ、激しく揺さぶった。

「ぼくはずっと見てきたんだ。民衆を導き、神々の教えを説くはず
の神官達だって、目先の利益しか考えていない。彼らは自分の利益
のために、ぼくと母を引き離し、殺したんだ！」

クロフの顔は怒りのために紅潮し、赤金色の瞳には怒りの炎が宿
っている。

「くそっ！」

クロフはディリーアから、建物の壁を殴る。

ディリーアはそんなクロフを見て、うつむいたまま黙り込んでい
た。

自分とは違った境遇で育ち、悩み苦しんでいるこの若者に、どん
な慰めの言葉をかけてあげればいいのか思いつかなかった。

口から最初に出てきたのは、ディリーアが思ってもみない一言だ
った。

「危ない！」

ディリーアがクロフを突き飛ばすのと同時に、目の前で白刃がき
らめいた。

数瞬遅れて、ディリーアの胸元を槍の一閃がひらめいた。

ディリーアはさっと身をひるがえし、炎が燃えさかる焚き火の方へ走っていく。

その後ろを槍を手にした数人の兵士が追いかけていく。

クロフはディリーアに突き飛ばされた姿勢のまま、建物の石壁にもたれかかっていた。

兵士達はクロフなど眼中にないかのように、少女の小さな背を追って走っていく。

「くそっ！」

遠ざかっていくディリーアの背を追いかけて、クロフは駆け出す。

「風よ。わが身に宿れ」

口の中でつぶやく。

兵士達との距離をわずか一瞬で縮め、彼らの頭上を軽々と飛び越える。

クロフはディリーアの背に必死に手を伸ばす。

その髪に指が触れるというところで、彼の背後から風切り音が響いてきた。

クロフはとつさに身を低くし、それをやり過ごした。

彼の頭上を風にも似た何かが通り過ぎていった。

振り返ると勝ち誇ったように笑みを浮かべる一人の兵士と目があった。

「うっ！」

女の低いうめき声に、クロフは視線を前に戻す。

前を走るディリーアの背からは細い白銀の槍が、夜空に向かって真っ直ぐ伸びている。

ディリーアの体は前のめりに倒れ、動かない。

クロフはディリーアのそばに駆け寄り、背中を引く。

うつぶせに倒れたディリーアの肩がかすかに動き、口元からは小さなうめきが漏れている。

救いの手 12

クロフは手早く傷口に布を巻き付けると、ディリーアの腕に手をかけた。

「おい、見ろよ。おれの槍が魔女に当たったんだぞ」
クロフの背後から兵士達の叫び声が近づいてくる。

兵士達の先頭を歩く男が、腕を大きく振り上げわめき散らしている。

「わかった、わかった。今回はお前の手柄にしといてやるよ。ただし、後で酒をおごれよな」

かがり火の焚かれている広場のちょうど中央。
クロフは四方を見回し、兵士達に取り囲まれていることを見て取った。

兵士達はそこで初めてクロフに気が付いたかのように足を止める。
かがり火のそばにいた兵士達も、槍を手に二人の周りを瞬く間に取り囲む。

「魔女め。一度ならず、二度までも、神官様をたぶらかすとは」
兵士の叫びに、クロフがそちらに顔を向ける。
すると兵士達の間をかき分けて、見知った人物が歩いてきた。

「やはりな」
白い衣を揺らし、ロキウスはクロフに歩み寄る。

ロキウスは長い杖をクロフの眼前に突きつけ、静かな怒りのこもった口調で尋ねる。

「何故、魔女の牢を開け、逃げるための手助けをした？」
クロフは黙ったまま、赤金色の瞳でロキウスを見上げる。

「気でも狂ったか？ それとも魔女にたぶらかされたのか？ そのどちらもか。まあいい。その理由は 神殿に戻ってから、ゆっくり聞かせてもらおう」

ロキウスは手を一振りし、高らかに叫ぶ。

「二人を捕らえろ！」

槍の先が高い金属音をたて、武具の触れ合う音が広場に響く。

兵士達の二人を取り囲む輪が徐々に小さくなる。

クロフは大きく息を吸い込み、剣の柄に手を伸ばした。

クロフは音もなく鞘から剣を引き抜くと、自分を取り囲んでいる兵士の槍の穂先を振り払う。

わずかに金属の触れ合う音がただけだった。

それだけで槍の先は蜂蜜のように溶けて、根本から折れ地面に転がった。

「動かないでください」

素早く立ち上がり、近くにいた兵士の一人に剣を突きつける。

「誰も、動かないでください」

クロフは自分を取り囲んでいる兵士を見回した。

「どうか、今回は見逃してもらえませんか？」

クロフは炎に照らされた兵士の顔を順番に見回し、白い衣を着たロキウスを見つめる。

ロキウスは眉を寄せ、怒りをあらわにする。

「どうしてそこまでその女のために尽くす。その女が一体お前に何をしてくれたというのだ」

クロフは寂しげに微笑んだ。

「本当に助けられていたのは、ぼくの方だったんです。ただ彼女が化け物になり、人間を憎むようになった理由が、ぼくにもほんの少しわかるんです」

兵士に突きつけた剣先が月明かりに白く光る。

「だからと言って、魔女を逃す理由にはならん」

それはロキウスの発した言葉ではなかった。

暗闇から響く声に、クロフは振り向いた。

「少ない手勢で、よく持ち堪えた」

ロキウスは頭を垂れ、道を譲った。

数名の家臣を従えた南の王は長い衣を揺らしゆっくりとクロフの

前まで歩いてくる。

城壁の上に数百の兵士が姿を現し、一斉に広場に向かって弓を構える。

「春の祝祭の前とは言え、兵達を集めておいて正解だったな」

王はあごひげをさすりながら、クロフを値踏みするように眺め回す。

「王様の手を煩わせて申し訳ございません。今回の件はすべてこちらの不手際でございます」

「ふむ」

南の王は槍の先を折られ戸惑っている兵士達を見回し、クロフへと視線を戻す。

「神官は皆良識のある方々であると思っていたが、あのような常識な輩もいるとは」

「申し訳ございません」

ロキウスは頭を下げる。

クロフは兵士に剣を突きつけたまま、南の王をにらみつけている。

「その責任、神殿の側で取ってもらいたいものだ。いかがかな？」

「はい、承知しております」

ロキウスは王の前に進み出て、クロフに杖を向ける。

「お前の命まで取るつもりはないが、少し頭を冷やせ。お前には休息が必要なのだ。神殿に戻り、心身をゆつくりと休めるがいい」

ロキウスは杖の先をクロフに向け、朗々と詩を唱える。

「木々のざわめき 梢を渡る

獣の叫び 荒野を渡る

風は岩山を上り 木々をなぎ倒し

つむじ風を伴い 空へと駆け上がれ」

ロキウスが高らかに詠い上げ、杖を天に掲げると、突如広場のかがり火の炎が揺らめいた。

ごうごうと強い風がわき起こり、黒い雲が夜空の月を隠す。

クロフがまばたきをする間に、その体は強風にあおられ足が地面

を離れる。

救いの手 13

突風に吹き飛ばされ、クロフと兵士の体は城壁に向かっていく。城壁に叩きつけられる直前、クロフは体の向きを変え、石を蹴り、地面に着地した。

クロフが剣を突きつけていた兵士は、そのまま城壁に叩きつけられ、頭から血を流している。

クロフは動かなくなった兵士を見つめ、ロキウスをにらみつける。

「兵士を巻き添えにするのか！」

「たかだか兵士一人が死んだだけのこと。些細なことだ」

クロフは城壁を背にしてロキウスに剣を構える。

「今回は神殿にいた頃のように、きみに勝ちを譲ってやることは出来ない。ぼくにも譲れないものがあるから」

クロフの赤金色の瞳が赤みを増す。

剣先からは炎にも似た白い光が揺らめいている。

広場の中央にあるかがり火が音を立てて燃え上がった。

炎は巨大な蛇のようにうねり、赤い火の粉を辺りにまき散らす。

地面をはい回る炎に、兵士達は四方八方に散り散りに逃げ、広場は悲鳴や怒号に包まれた。

その隙にクロフは倒れているディリーアに駆け寄り、その体を抱き起こした。

「静まれ！」

ロキウスは杖を掲げ、大声で言い放つ。

ロキウスが一声叫ぶと、広場を風が渦巻き、燃えさかっていた炎も風に飛ばされ小さくなった。

逃げ回っていた兵士達が一斉に動きを止め、ロキウスに注目する。ロキウスは静まった炎と兵士達を見回し、クロフへと杖を突きつける。

「諦めろ。諦めて神殿へ戻れ。しかるべき罰を受け、それですべて

を忘れるんだ」

クロフはディリーアを肩に背負い、立ち上がった。

「それは出来ない。ぼくはもう神殿に戻ることは出来ない。あの頃には、もう戻れないんだ」

二人の間に風が吹き荒れ、かがり火の炎が再び舞い上がった。

風は砂や小石を空に巻き上げ、黒い雲が月の光を遮った。

炎は熱と光をまき散らし、広場の石畳の上を明るく照らした。

兵士達は遠巻きに二人を眺め、そこを動く者は誰一人いなかった。クロフとロキウスの間には炎と風が渦を巻き、その柱は天まで焦がすほどだった。

「諦めろ！」

炎と風のせめぎ合う渦を挟んで、ロキウスがクロフに呼びかける。白い頭巾の下からのぞく目には、今までのような厳しさはなく、哀れみと寂しさが入り交じっている。

「諦めて、神殿に戻れ。今ならまだ間に合う」

クロフはディリーアを肩に背負ったまま、ゆっくりと首を横に振る。

ロキウスは悲しさを含んだ声で訴える。

「神殿から逃げて、それでどうなる。一生追われ続けることになるんだぞ。地位も名誉もない、貧しい生活を送って、それでどうなる。そんな女を一人助けただけで、お前の人生を棒に振る気か？」

クロフは赤金色の瞳を細め、わずかに微笑んだ。

「地位や名誉を追い求めるのも、それも一つの生き方かも知れない。でも、名も無き人々のように、貧しくても心安らかな生活を送るのも、一つの生き方なんだ。どちらが劣っていて、どちらが優れているかなんて、その人にしかわからないんだ」

クロフはディリーアを背負い直し、剣を高々と振り上げた。

ロキウスは白い裾を振り、杖を体の前に構える。

「ごめん、ロキウス」

クロフは剣を地面に勢いよく振り下ろす。

足元の地面が円形に陥没し、膨大な量の土や小石が風に乗って舞い上がる。

見る間に夜空を土色に染め、辺りは一寸先も見えないほどだった。炎と風が収まった後には、クロフの姿はどこにも見当たらなかった。

「追え！」

ロキウスは背後で呆然と立ち尽くしている兵士や、城壁にいる弓塀に大声を張り上げた。

兵士達は思い出したようにそれぞれの持ち場に帰り、クロフの姿を求めて走っていった。

「これがお前の選んだ道か、クロフ」

まだ収まらない土埃の中で、ロキウスは寂しげにつぶやいた。

救いの手 14

クロフは背後から追っ手の気配を感じながら、ディリーアを背負い城壁の上を駆けていた。

あらかじめ裏門の側に用意しておいた馬も、この騒ぎのために無駄になってしまった。

クロフは走りながら、別の脱出方法を考えていた。

怪我を負ったディリーアを連れて逃げれば、瞬く間に兵士達に見つかってしまうだろう。

安全に国外に出るには、何としても馬が欲しいところだ。

クロフは城壁の上を走りながら、明かりの灯る眼下の街並みを眺めていた。

「いたぞ！ 城壁の上だ！」

兵士達の叫ぶ声を聞き、クロフは天を振り仰いだ。

空には雲がたなびき、その隙間から白い月が光を投げかけている。多くの足音が響き、城壁の向こうから松明を掲げ持った兵士の一団が近づいてくる。

クロフはその場に立ち止まり、腰に下げた剣の鞘に手を回した。すると足元からクロフを呼ぶ声が聞こえてくる。

「クロフ様。早く、こちらへ」

高い馬のいななきが、城壁の外からクロフの耳に届く。

剣から手を放し、城壁を見下ろした。

見ると草地を駆ける、馬の影がこちらに近づいてくる。

クロフは荒野に響く馬のひずめの音に耳を澄まし、目の前に迫ってくる松明の炎を見つめる。

夜空の月が雲に隠れ、一瞬の暗闇が訪れる。

クロフは腕を横に一閃させ、兵士達の松明の炎をすべて消した。

兵士達の一瞬の油断を誘うのには、それで十分だった。兵士達を襲った完全な暗闇に、彼らはざわめき混乱した。ある者は近くの兵士の足を踏み、ある者は隣の兵士にぶつかった。その隙を逃さず、クロフはディリアを抱え、城壁を飛び降りた。馬の影は長い首をもたげ、空中に飛び上がった。

クロフは馬と息を合わせたかのように、あやまらずその背に飛び乗り、馬の手綱をつかむ。

「きみは」

クロフは馬の首につかまりながらつぶやく。

「詳しい話は後です」

馬は一声高らかにいなくなくと、風のように走り出した。

クロフはディリアを抱き留め、手綱につかまる。

耳の横を風が通りすぎ、ごうごうと獣に似たうなりをたてる。

吹き抜ける風は冷たく、手綱を握る手が徐々にかじかんでくる。

馬は北の方角を指し、城壁とは反対の方角へ走り出す。

瞬く間に城壁の石壁が背後に遠ざかっていった。

報告を受けたロキウスは急ぎ馬小屋へ向かった。

あらかじめ館に残っていた神官と兵士は、すでに馬で二人を追いかけている。

ロキウスは杖の先に明かりを灯し、馬小屋へと向かう。

馬小屋へたどり着くと、馬番の老人ともう一人、予想外の人物が立っていた。

「ロキウス様は、クロフ様を追うのですか？」

フィエルナ姫は長い衣を揺らし、明かりを手にじっとロキウスを見つめている。

フィエルナ姫の右手には、国内で一番早いと言われる灰色の馬の手綱が握られている。

「そうです。あいつはあろうことか、明日処刑する魔女と逃げたのです。直ちに神殿に連れ戻し、しかるべき処罰を与えなければなりません」

馬番の老人が困ったように二人の間で立ち尽くしている。

ロキウスはフィエルナ姫の前に立ち、目を細める。

「姫、わかつてくださったのなら、どうかその手綱を渡してください。今すぐあいつを追わなければ、取り返しの付かないことになります」

フィエルナ姫は手綱を握りしめ、一歩後ろに退く。

「どうか、わたしの話を聞いてください。あの二人を、クロフ様を、あなたは追ってはいけないのです。追えば、この国に災いが降りかかります」

ロキウスは驚いて目を見開いた。

立ち尽くしている馬番の老人が困り果てたように話す。

「わ、わしは何が何だかさっぱりです。姫様は馬小屋に来られてから、逃げた者を追うなど言って聞かないのです」

ロキウスはため息をついた。

フィエルナ姫はそれを見て顔を赤らめた。

「あなたは、わたしがわがままを言っているとお願いでしょうけれど」

フィエルナ姫は顔を伏せ、手綱を握った両手を胸の前で組み合わせる。

「だって、太陽の女神様が夢に現れて、そうおっしゃるのですから、仕方が無いじゃないですか。わたしにはお告げに従う義務がありますから」

「それは、どういうことです？」

フィエルナ姫の意外な一言に、ロキウスは目を丸くする。

「彼女が、クロフ様のお相手が、太陽の女神様に認められた運命の相手なら、わたしは諦めるしかないじゃないですか！」

小屋中に響き渡る声で叫ぶなり、フィエルナ姫は肩を振るわせ泣

き崩れた。

ロキウスは困惑し、視線を馬番の老人に向ける。

馬番の老人も同じように困った顔をして、フィエルナ姫を見下ろしていた。

救いの手 15

月夜の草原を駆ける馬は、風のような速さで北へ向かっていた。岩のむき出しになった草道を飛び越え、月に照らし出された丘を駆け抜けていく。

その背にまたがるクロフは、背後の暗闇をつぶさに振り返った。いつ獵犬が放され、馬に乗った兵士達が追いかけて来るとも限らなかった。

クロフの予想は当たった。

月が半分ほど西に傾く頃には、荒野の彼方に獵犬の吠え声と馬のひづめの音とが風に乗って聞こえてくる。

クロフは視線を前に戻し、馬の手綱を操った。馬はいっそう足を速め、吠え声とひづめの音はわずかばかり遠のいた。

しかし獵犬に吠えられ追い立てられれば、どんなに訓練された馬であろうと集中が解けるものだ。

馬は緊張のため息を切らせ、足の運びが遅くなっていく。

クロフは少しずつ近づいてくる吠え声に、馬の手綱を強く振るう。馬が小石に躓いたのか、一瞬だけ体勢が崩れる。

クロフは馬の首にすがりつき、ディリリアが落ちないように抱き留めた。

その拍子に足から宿り木の靴が片方脱げ落ち、背後の闇に転がっていく。

クロフが叫ぶ間もなく、靴の落ちたところから植物の芽が幾つも生えてくる。

木の芽は細い枝葉を伸ばし、幾重にもからみつきながら夜空に向かって伸びていく。

クロフが遠ざかっていく間にも、木々の幹は大人が両腕を広げたほどもなっていた。

辺りは枝の生い茂る林になり、どっしりとした木々が何本も兵士の行く手を阻むように並んでいる。

クロフは馬を走らせながらも片方の靴を脱ぎ、同じように後ろに放り投げた。

するとまた同じように、そこから植物が芽を出し、鬱蒼とした森になった。

クロフは目線を前に戻し、一路北へ向かって馬を走らせ続けた。

月明かりの中、闇に包まれた森に気が付いた兵士達は、馬の足を緩め立ち止まった。

獵犬達を呼び集め、突如現れた森を回り込む方法を考えた。

同行していた神官の一人が、杖を掲げ進み出た。

「わたしが森に道を造りましょう」

神官は杖を構え、祈りの詩をつぶやいた。

「火種燃え くすぶる炉ばた

木々の枝葉は 灰へと変わる

羽虫を焼く 火柱のように

明るく強く 輝きをもたらせ」

神官の杖の先に炎が宿り、森に火が放たれた。

森の木々は炎に包まれ、一直線に北へと向かって燃え広がった。

赤い炎が下草を焼き、太い幹や枝が燃えて裂ける。

辺りは真昼のように照らし出され、夜空をも焦がす勢いだった。

炎と煙が収まるなり、兵士達は追跡を開始した。

黒く焼けこげた道を踏みしめ、所々くすぶる火の粉を明かりに、森への道を北へと駆けていく。

クロフは獵犬の吠え声に、後ろを振り返った。

丘の彼方に兵士達の影がちらちらと揺れて見える。

その姿は少しずつ大きくなり、こちらに迫ってくる。

クロフは手に持った盾を眺め考えた。

宿り木の靴があのような奇跡を起こしたのなら、この盾も神々の加護が受けられるのではないだろうか。

クロフは藁にもすぐる思いで、盾を腕から外し夜空に祈った。

「もしもぼく達の罪が神々に許されるのなら、追っ手から逃し、導いてください」

クロフは盾を背後の草地に放り投げた。

ほんの少しの間をおいて、盾が落ちた場所から低い地響きが聞こえてくる。

荒野の岩が盛り上がり、暗い夜空に影を落とす。

岩は幾重にも重なり、小高い岩山となつて兵士達の行く手を遮った。

クロフは馬を励まし、北への道を走り続けた。

岩山にたどり着いた兵士達は、小高い岩山を見上げ考え込んだ。

その岩山を馬で登るには骨が折れた。

岩山を見上げている兵士達の前に、今度は別の神官が進み出た。

「わたしが岩山に道を作りましょう」

神官は杖を構え、祈りの詩をつぶやいた。

「谷間を漂う 雲を吹き消し

雷のとどろき 雨足より早く

嵐の波間 ワタリガラスより速く

石壁を崩し 荒野へと帰せ」

神官が唱え終わると、辺りに風が吹きすさぶ。

岩山の石は舞い上がり、岩は削られ崩れ落ちた。

低いうなり声を上げ、石や小石を空へと巻き上げる。

岩山は形を変え、なだらかな台地となった。

風が収まるなり、兵士達は再び追跡を開始した。
小石を跳ね上げ、岩の裂け目を飛び越え、なだらかな台地を北へと
向かう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2311z/>

赤と青の神話 三章

2011年12月22日07時50分発行